「全部いただきます」

渡辺恵子　（60 代）

あれは十年前のことだった。義母が我が家に二泊して、帰り際に私に言った。

「世話になったなあ。いくらか置いていこうか？」

私は、「とんでもないです」と、首を横に振った。お金をもらうつもりなど毛頭ないけれど、嫁の立場では、そう答えるしかない。――選択肢のない質問を、なぜするんだろう――。

その一週間後、東京在住の息子夫婦が帰省した。二人ならどう感じるのか聞いてみたくなり、あの日の義母の言葉を話題にした。

「おばあちゃんのあの一言、どう思う？」私の問いに、息子が驚いた顔をした。

「身内やのに、そこまで気を遣わんでもええのになあ」

息子の反応に、私は大きなため息をついた。

すると、隣で身を乗り出して聞いていたお嫁さんが口を挟んだ。

「お義母さんの気持ち、私はすごくわかります。でも、お義父さんや康弘さんに理解してもらうのは無理だと思うんです。だって、おばあちゃんとは血がつながってますもの」

彼女の発想に、自分の中で渦巻いていた謎が、少し解けたような気がした。

今度は、彼女に尋ねた。「あなたなら、何て返事する？」

「私なら、『嬉しい！』って言います」

思いもかけぬ彼女の言葉に、私は息をのんだ。

「だって、相手がお義母さんですもん。私、遠慮なんてしません」

彼女は屈託なく笑った。

たしかに、そうだ。同じ言葉でも、相手との距離感によって、受け止め方もまるで違う。

私は、自分から義母との間に壁を作っていたのかもしれない。義母が来るとなると家の片付けや掃除に奔走し、お茶菓子や料理の準備に追われ、てんてこ舞いだった。帰った後は、いつも心身ともに疲れ果てていた。私にとって義母は、気を抜くことのできない「お客様」だったのだ。

息子夫婦が東京へ帰る日の昼食に、私はコロッケを用意した。じゃがいもよりミンチと玉ねぎのほうが多い、我が家自慢のコロッケだ。彼女は、「持って帰りたいなあ」と、いたず

らっぽく笑った。余分に十個あったので、「好きなだけどうぞ」と言うと、返ってきた答えは、「全部いただきます」だった。

「いいけど、荷物、重たくなるよ」

私の心配をよそに、彼女はあっけらかんと言った。

「お義母さん、大丈夫です。荷物は康弘さんが持ちますから」

私は思わず噴き出した。

楽しそうにパックにコロッケを詰める彼女の姿を眺めながら、私の心の中にあった小さな壁が、いつの間にか消えていることに気づいた。

八年前に亡くなった義母の五目寿司は絶品だった。「好きなだけ持って帰ったら？」と、いつも勧めてくれたのに、義母の気持ちに素直に甘えることができなかった。

でも、今ならわかる。義母が私に渡したかったのは、お金でも五目寿司でもなく、嫁と姑という垣根を越えて、一人の家族として向き合える関係だったのかもしれない。

私も、彼女のように笑顔で「全部いただきます」と返せていたなら、義母はどんな表情を浮かべただろうか。お義母さんの五目寿司、もらって帰ればよかったな……。